

# 和語「い〔膽〕」と漢語「イ〔胃〕」

—— 身体語彙史研究の一環 ——

宮 地 敦 子

- 一 はじめに
- 二 臓と腑の配合について
- 三 膽「タン」と「胆」について
- 四 胃について
- 五 おわりに

—

御諸みもろの其の高城たかきなる大猪子おほいのがはら 大猪子おほいのが腹にある肝向かへふ許許ゆる呂りよをだにかあひ思おもはずあらむ

〔古事記・下・仁徳〕

かつて、筆者は右の歌謡の解釈を糸口とし、『心臓』から『心臓』へ」と題して述べたことがある。もと、コロは腹中であつて物思ものう働はたらきをするものと意識いしされていたことがうかがわれる。古代中国において「心シン」は五蔵ごそう（肝・心・脾・肺・腎）の「君クニ主ヌシ」とされた。

意内多<sub>レ</sub>端、口外難<sub>レ</sub>出。謹以三首之鄙歌、欲<sub>レ</sub>写三藏之鬱結。〔万葉集・八六八〜八七〇・題詞〕

右の憶良の題詞における「五藏」は、さまざまの物思いをするものの総称として用いられていると考えられる。古代中国において、「五藏（五臓）」は体内にあってその精気を藏<sub>ぞう</sub>して漏らさないもの（『素問』）であり、精神血気魂魄を藏するもの（『靈枢』）とされた。また、「腎」は精を、「心」は神を、「肝」は魂を、「肺」は魄を、「脾」は「志」を、それぞれ藏するもの（『韓詩外伝』）ともされた。要するに、五藏は人体内にあってその精神<sub>せいしん</sub>を納めておく五つの藏<sub>ぞう</sub>と考えられていたのである。

一方、六府（大腸・小腸・膽・胃・三焦・膀胱）は水穀を変化させ津液をめぐらすもの（『靈枢』）とされた。六府は、一般に、中空の器官であって、飲食物の出納・転輸・伝化の機能を有する六つの府庫と考えられていたのである。

五藏と六府のちがいについては、北宋医学の影響をうけた梶原性全の『頓医抄』（嘉元元年成立）では次のように比喩的に述べている。

五藏は陰に属し裏に属す。六府は陽とし表とす。藏と云はくらなり。くらはものをおさむ故に諸神をおさめて精神流通す。府と云は庫府<sub>くらふ</sub>とてこれもくらなり。これは藏のくらよりすこしあらはなり。水穀をおさむ。糟粕をいだしいるくらなり。たとへば藏のくらは金銀絹帛のたからをおさむくらなり。府のくらは五穀等を入れいだすくらなるべし。〔頓医抄・四四〕

いわば、五藏は宝物を納めておく藏であり、六府は水穀を出し入れする倉庫であるというのである。また、のちになるが、岡本一抱の『医学入門診解』（宝永六年成立）には、次のようにその差異を述べている。

六府の役目は変化したる物を外へ伝へ送るに仍て、五藏の如く満つると云ふ事なく、又しては空倉<sub>あまくら</sub>になり、又しては空倉になるぞ。〔医学入門診解・一〕

以下、本稿では、五藏と六府の配合について簡単に述べたのち、六府（六腑）のうちの「タン〔膽〕」（以下「胆」と表記）とその和名「い」に焦点をあてて調査・考究し、同音の漢語「イ〔胃〕」とのかかわりについても言及したいとおもう。

一一

『和名類聚抄』蔵府類には「五藏 中黄子云五藏肝心肺腎也」とし、

肝 白虎通云肝 干反 和名岐毛 木之精也色青

心 白虎通云心火之精也色赤

脾 白虎通云脾 俾移反 和名与古之 土之精也色黄

肺 白虎通云肺 糜反 和名布久不久之 金之精也色白

腎 白虎通云腎 時忍反 和名無良止 水之精也色黒

とある。また、「六府 中黄子云六府大腸小腸胆胃三膽膀胱也」とし、

大腸 中黄子云大腸 長反 和名波良和太 爲伝送之府

小腸 中黄子云小腸 和名保曾和太 爲受盛之府

胆 中黄子云胆 都敢反 和名伊 爲中精之府

胃 中黄子云胃 謂反 和名久曾和太布久呂 爲五穀之府

三膽 中黄子云三膽 焦反 和名美乃和太 孤立爲中瀆之府

膀胱 広雅云膀胱 旁光二反 和名由波利不久呂 脬也唐韻云脬 胞反 腹中水府也

とある。

さて、五藏と六府とは互に配合すること衆知のとおりである。前引『頓医抄』および『下学集』には左のようにみえる。

論曰胆は肝の府也。：論曰小腸の府は心に属す。：論曰胃府は脾に属す。：論曰大腸府は肺につかさどる。：論曰膀胱は腎につかさどる。：腎は二あり。左を腎と云。膀胱を府とす。右を命門とす。三焦其府也。

〔頓医抄・四三〕

五藏 六腑 先論五藏者、左心<sup>ハ</sup>肝<sup>カ</sup>腎<sup>シ</sup> 右肺<sup>ハ</sup>脾<sup>ヒ</sup>命門<sup>イ</sup>也。命門與腎同位也。五藏有六府。心<sup>ハ</sup> 小腸<sup>ハ</sup>腑、肝<sup>ハ</sup> 胆<sup>シ</sup>腑、腎<sup>ハ</sup> 膀胱<sup>ハ</sup>腑、肺<sup>ハ</sup> 大腸<sup>ハ</sup>腑、脾<sup>ハ</sup> 胃<sup>シ</sup>腑、命門<sup>ハ</sup>三焦<sup>ハ</sup>腑也。

〔元和本下学集・支体門〕

みぎに據るかぎり、これを表にすると次のようになる。

			左		右	
腑	小腸(腑)	胆(腑)	膀胱(腑)	大腸(腑)	胃(腑)	三焦(腑)
藏	心	肝	腎	肺	脾	命門(右腎)

なお、三焦が属するものについては諸説がある。『頓医抄』では「三焦の府はいささか口伝あり〔中略〕一身みな三焦にあたりたる故に三焦は名のみありて形なしと云へり」という一説も紹介している。三焦は「心包絡」に属するとするものもある。のちの『鍼灸重宝記』では、「五藏の色体」と題して「五藏 肝・心・脾・肺・腎」「五腑 胆・

小腸・胃・大腸・膀胱」をあげ、命門や三焦には觸れていない。

三・一

本項では、「胆」の音読「タン」について述べる。胆は、西洋医学にいわれる「胆嚢」(Gallblase)にほぼ同定される。一方、東洋医学では諸説あるけれども、胆(の腑)は、肝臓に付いて、胆汁を分泌し、消化をたすけるばかりでなく、中枢神経にも関与するものとされた―後述―。辞書における例は前節にゆずり、以下には文脈を与えられた例をあげることとする。

医師、彼の病する人の許に至りて、病を見て云く、「我れ、此の病を治すべからず。針も至るべからず。薬も及ぶべからず」と云て、治せずして返りぬれば、病める者即ち死にぬ。胆の下をば膏カウと云ひ、胆の上をば膏カウと云ふ也。然れば、其の所に至りぬる病をば、治の无ければ、かくのごとく云ふなるべし。〔今昔物語集・一〇・二三〕

右の例については、本文に不安定な点のあることをまずことわっておかねばならない。「膏膏」の位置は、胆上胆下ではなく「心上隔下」(説文)である。――ちなみに『今昔物語集』の漢字索引によれば「胆」はこの説話の二例のみである――。書写の間に「心」を「胆」にあやまったのかもしれない。また「胆」を音訓いずれに読むかということが次の問題である。日本古典文学大系では、これに「い」という振仮名をつけ、それは名義抄(後述)の訓に據ったものであることを頭注でことわっている。しかし「盲」「膏」いずれも音読している右の文脈において、とくに「胆」だけを訓読する積極的な理由がみとめられない。現行のいくつかの古語辞典は、この大系本をテキストにすることによって、「い(胆)」の項目にこの例をあげているけれども、本稿では、音訓明瞭ではないものの、タンという音読が無難であろうという判断からここにあげた。以下は音読してほぼ問題ないであろう。

肺のしたに心・肝・脾ならべり。肝のしたに胆あり。脾の下に胃の府あり。胃の下に小腸あり。小腸の下に大腸あり。

〔頓医抄・四四〕

腹も張り腋の下腫れ咽いたみそぞろさむくは胆の俞としれ

〔鍼灸要歌集・三〕

胆の府は重さ三兩三銖その象ち瓠のごとし。肝の藏葉の間に蔵れ居る。背の第十椎に附く。精汁を包むこと三合、その精汁味ひ苦し。

〔鍼灸重宝記〕

胆は肝心の短葉の間にあり、中正の官にして物をさだめ決断することをつかさどる。

〔医道重法記〕

彼老屠が彼の此のと指示し、心・肝・胆・胃の外に、其名の無きものを指して、「名は知らねども、己れ若きより数人を手に懸け、解き分けしに、何れの腹内を見ても、此所にかよふの物あり、かしこに此物あり」と示し見せたり。

〔蘭東事始〕

みぎの例で分かるように、単独語「胆」の例はほぼ医書のなかに限られる。胆は決断をするもの〔素問〕、肝藏の余氣があつまつて精を成すもの〔脈経〕とされたところから「中精の府」とか「中正の官」とよばれた。比喩的にいえば、肝藏は將軍のように謀慮をつかさどるが、決断を下すのは胆の腑の役目であるとされた。一般の作品に多く見られる熟語の用法をみても、「胆力」「胆氣」「肝胆」「心胆」「大胆」「豪胆」「魂胆」「落胆」など、胆は〔臟器と〕いうよりも〕古くから、氣力・精神力などにかかわるものとして把握されていたことがうかがわれる。このような用法は枚擧にいとまがないけれども、近代の例を一つあげるにとどめる。

何歟、カウ、非常な手段を用ひて、非常な豪胆を示して、「文三は男子だ、虫も胆氣も此の通り有る。〔中略〕と口で言はんでも行爲で見せ付けて昇の胆をうばつて、叔母の眠りを覚まして、若し愛想を尽かしてゐるならば、お勢の信用をも買戻して、そして：そして：自分も実に胆氣が有ると：確信して見度いが、如何したもので有らう。

〔浮雲・九回〕

本項では、「胆」の訓読「い」について考察する。まず、「い」という語は古くから存在していたと推測されることを述べたい。

たとえば、現在の「伊吹山」に関し、『日本書紀』には、左のように「五十」「胆」二つの表記が近接して見出される。

日本武尊、更還<sub>ニ</sub>於尾張<sub>一</sub>、即娶<sub>ニ</sub>尾張氏之女宮實媛<sub>一</sub>、而淹留<sub>ニ</sub>躰<sub>一</sub>月。於是、聞<sub>ニ</sub>近江五十葺山有<sub>ニ</sub>荒神<sub>一</sub>、即解<sub>レ</sub>置<sub>ニ</sub>於宮實媛家<sub>一</sub>、而徒行之。至<sub>ニ</sub>胆吹山<sub>一</sub>、山神化<sub>ニ</sub>大蛇<sub>一</sub>当<sub>レ</sub>道。〔景行紀・四〇年〕

ちなみに『古事記』(中・景行)には「伊服岐能山」とある<sup>(8)</sup>。

また、津輕の北に位置したらしい<sup>(9)</sup>「胆振鉏」には、左のような訓注が施されている。

阿倍臣、簡<sub>ニ</sub>集飽田<sub>一</sub>(<sub>ニ</sub>秋田<sub>一</sub>)・淳代(<sub>ニ</sub>能代<sub>一</sub>)、二郡蝦夷二百四十一人、其虜三十一人、津輕郡蝦夷一百十二人、其虜四人、胆振鉏蝦夷二十人於一所、而大饗賜<sub>レ</sub>祿。胆振鉏、此云<sub>ニ</sub>伊浮梨婆陸<sub>一</sub>。〔齋明紀・五年〕

そのほか、『日本書紀』には「胆駒山」(神武前紀・皇極二年・齋明元年)・「胆狭山(部)」(安閑元年)・「胆殖」(安閑二年)・「胆年(部)」(同)などの地名がみえる。

ちなみに「胆駒山」に関しては『万葉集』では「伊故麻山」「伊駒山」「射駒山」とある<sup>(10)</sup>。

一方、人名に関しては左のような表記が見出される。

天皇幸<sub>ニ</sub>山背<sub>一</sub>。〔中略〕娶<sub>ニ</sub>山背刈幡戸辺<sub>一</sub>。生<sub>ニ</sub>三男<sub>一</sub>。第一曰<sub>ニ</sub>祖父別<sub>一</sub>。第二曰<sub>ニ</sub>五十足彦命<sub>一</sub>。第三曰<sub>ニ</sub>胆武別命<sub>一</sub>。〔垂仁紀・三四年〕

ちなみに『古事記』中・垂仁には関連ある箇所「伊登志別王 伊登志三字以音」とある。

そのほか『日本書紀』には、「胆香足姫命」(垂仁一五年)・「胆津」(欽明三〇年)・「胆鹿島」(齋明五年)・「胆香瓦」(天武元年)なども見出される。

これらの諸例を考え合わせると、上代において、固有名詞「い」の借訓仮名につき、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』<sup>6)</sup>に共通して「伊」(または「五十」)の用いられることが多いけれども、ひとり『日本書紀』だけは、とくに「胆」の使用がしばしばであったことが知られる。これは民族的・地域的・信仰的その他何らかの理由によるものかどうかについては後考に俟つ。(中古以降の「胆沢」については注記にゆずる<sup>6)</sup>)

みぎのような借訓仮名例のほかに、「竜胆」(リウタン→リンドウ)の和名として「たつのいくさ」(季語・秋)の存在がみとめられる。

竜胆 二十八十二月採根陰干。 太豆乃伊久佐

〔新撰字鏡〕

竜胆(リウタン→リンドウ)は、根がまるで胆のように苦く、干して漢方薬として用いられた。「い(胆)」という語は、古くから存在したと認めて大きなあやまりはないであろう。

しかし「い」が文脈を与えられた例は極度に少ない。否、ほとんどないといっても過言ではなからう。すなわち、訓点資料(例、大智度論、陽明本遊仙窟)の和訓、およびそれを反映した辞書の例にほぼかぎられている。古辞書の例は左の如くである。〔和名抄〕については前節に記したのでここには省略にしたがう)

膽 胆也 伊

〔新撰字鏡〕

胆 イ

〔色葉字類抄〕

胆 イ キモ<sup>6)</sup>

〔類聚名義抄〕

さて、和文の作品には、左の例が稀なものとして見出される。



鯉の胆いと鱸いとをとき合て目につねに入るべし。すこしかわきいたみてなをるなり。〔頓医抄・一九〕

熊は手を負ひ、瀧口にたけりてかかる。〔中略〕瀧口、この矢をつがひ、しばらく返して、月の輪をはすしろに、いにかけて射ければ、熊はすこしもうごかず、矢二つにてとどまりける。〔曾我物語・一〕

右の部分は本文異同があり、「い(胆)」の確例とみとめてよいかどうか若干問題がのこるけれども、これが熊に関する話である点は見逃せないとおもう。というのは、中世の或時期以後は、漢方薬として珍重された「熊胆」の和名「くまのい」がしばしば用いられており、「い」は主として複合語「くまのい」の中に残存するにすぎなくなつたと無関係ではあるまいとおもわれるからである。それを裏書きしているとみとめられる中世末・近世末の辞書の例を左にあげる。

I. (イ)、△胆囊。ただし複合してでなければ用いられない。例 Cumano i (クマノイ)〈邦訳日葡辞書〉

I. イ、(胆) Gall, bile kuma no i (クマノイ) bear's gall Ushi no i (ウシノイ) ox-gall. 〈和英語林集成〉

「くまのい」が一般の作品に用いられた例を左にあげる。

手づから打ちしくまのゐぞ。諸病に是を用ゆべし。〔心中恋の中道・中〕

熊の胃を年貢にあぐる秋の月。〔犬居士〕

月夕熊の胃売りが仕舞ぎは。〔若みどり〕

世に医者いの多き中に、附子ふし・熊胆くまのいを遣ひ覚えて療治する医者もあり。又人参じんじんを第一に用いて療治する医者もあり。〔中略〕人参じんじんを勝れたりといはんや。附子ふしと熊胆くまのいを劣れりといはんや。名医は何にても病の愈ゆべきものを用ひて疾やまひを愈やし、諸薬しよやくを尽く遣ひ覚へて療治すること善かるべけれ。〔都鄙問答・三〕

熊の頭を打おとし、亦その胆たまを撈まづり出して、これを鶴龜つるかめに与へつつ宜ふやう、「熊胆くまのたまはとり易からず。故にその價あたい最高し。これを腹はらせば、心を清くし、肝かんを平かにし、目を明かにして翳かすみを去り、蝮蟻虫はものむしを殺す。汝達その一つを售うりて路費みようとし、一つを寧王女ねいわんによに進まらせよ」

〔椿説弓張月拾遺・二〕

ここで留意したいのは、『犬居士』などの「熊の胃」という表記である。この種の表記はすでに『運歩色葉集』『秘伝雑方集』に見え、中世末・近世初頭には、「い〔胆〕」は複合語の中に殘存するにすぎなくなつたばかりでなく、その「くまのい」の「い」さえ「胃」と意識されるほどに衰退していたことの一証といえるのではなからうか。

#### 四

本節では、「イ〔胃〕」に関して述べる。胃は脾臓に属する腑であること二節でふれたとおりである。(臟と腑が対になって熟語となっているのは、五臟六腑のうち、「肝胆」と「脾胃」のみである)「胃」は音読されるのが原則であるが、前節にならって古辭書における和訓について左に記す。

膾 禹貴反。久曾不久呂

〔新撰字鏡〕

胃 謂反。久曾和太布久呂

〔和名抄〕

胃 クツブクロ

〔名義抄〕

みぎの「くそ(わた)ぶくろ」は漢字に対して無理に造語したものかとおもわれる。(肺に対するフクフクシもこの類である)

「胃」の医書での例は、三節にゆずり、ここでは、近世中期になって、それまでと異なり「胃」を非常に重要視した享保五年刊の左の例をひとつあげるにとどめる。

脉本<sup>三</sup>胃氣<sup>一</sup>、脉胃の氣を以て本とする者は、胃は土に属して中央に位し、其氣は四時に旺し、臟腑を養ひ、四体を榮して過不及なく中和の道を行ふ故に諸脉に和氣あるを胃の氣ありとす。「中略」胃は人生れ出ては乳汁水穀にて育す。彼の君主の心も、命門の腎も胃の養にてたつなればこれを肝要とするなり。

〔袖 医方大成〕

「イ〔胃〕」は「い〔胆〕」と異なり、中世の或時期以降には一般作品にも用いられるようになったとおもわれるが、次の二辞書に示すとおり、前者では「胃の腑」が普通に用いられたという説明文があり、後者では「胃」が項目として安定し、「胃の腑」はいわば言い替えにすぎなくなったことが知られる。

1. (イ)、△胃、ただし、普通には Ino fu (イノフ) と言われる。〔邦訳日葡辞書〕

1. 牛、胃 (The stomach. I no fu (イノフ) the stomach. 〔和英語林集成〕

事実、左の一般作品群では、はじめはほとんど「胃の腑」の形で見出される。しかも、「納得する」意の「――に落ちる」「――に落ちつく」などの慣用句の中に相当見受けられることも注目される。

つばさあるものは手無く、角あるものは上齒無し。食を呑むものは卵を生み、胃の符なきが故に乳房なく、膀胱の符なきものは塩をくらふ事あたはず。〔浮世物語・四・五〕

太郎三郎一々に聞とどけ、きさまが申した分ではさらさらのふにおちませぬ。かみさまの御意ではつき(＝発起)いたした。御尤。〔今宮心中・上〕

先づ思召の一通りおせきなされずと、本蔵めが胃の腑に落付く様にとつくりと承はらん〔中略〕ム、よう訳をおつしやつた。〔仮名手本忠臣蔵・二〕

酒は百薬の長といふは公道也。交を和らげ憂を消は目に見えて能キ物とは誰もしれり。しかれども過ぐる時は胃腑をくさらし、胆をふとくし忽に病を発。いましむべし、慎べし。〔猪の文章〕

コリヤ泣かんすか、なくとは別して忝い。可愛男にや泣きよがちがふ、足をかざめてゐるのふでしめて、しめてしよがいのく。コレ 此様にしめておくれ。

〔奥州安達原・二〕

心の臓に熱ありとみれば黄連をもちひ、肺の臓に熱ありとみれば黄芩を用ひ、胃の腑に熱毒盛なれば石膏を服せると云ふやうなもので、〔中略〕愚痴の病氣を治するには智恵とそれそれに療治の仕容が違ふ。

〔勸導要語・一〕

胃の腑へ落つるやうにいはいはしやれ。

〔たとへづくし〕

次の作品では、「胃の腑」と「胃」を併用している。また「脾胃袋」という語もみえる。

脾の臓と胃の腑と二つ合せて脾胃といふ。脾は一切の食物をこなす役、胃は食を受けとる役にて、朝晩の食物を皆こゝへ入れてこなすから、腹の内の甘物屋なり。〔中略〕脾胃袋のうちの若い者、脾蔵胃蔵の二人、毎日の食物を米を搗くやうにこなして大腸小腸の經へ渡してやる。〔中略〕脾蔵胃蔵ひい／＼といつて働く。今の世に切ないのをひい／＼といふは此謂なり。

〔十四傾城腹之内〕

さて、今日では「胃」が一般作品に用いられること枚擧にいとまがないが、ここでは、明治後期、「胃弱」に悩んだ苦沙弥先生の日記に関する例の一端をあげるにとどめる。

神田の某亭で晚餐を食ふ。久し振りで正宗を二三杯飲んだら今朝は胃の具合が大変い。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。〔中略〕先達て〇〇は朝飯を廃すると胃がよくなると云うたから二三日朝飯をやめて見たが、腹がぐろ／＼鳴る計りで功能はない。〔中略〕B氏は横膈膜で呼吸して内臓を運動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから試しにやって御覧といふ。是も多少やつたが何となく腹中が不安で困る。夫に時々思ひ出した様に一心不乱にかゝりはするものゝ五六分立つと忘れてしまふ。忘れまいとすると横膈膜が氣になって本を読む事も文章をかく事も出来ぬ。

〔吾輩は猫である〕

本稿において主として述べようとしたことは次の如くである。

一、いわゆる六腑のうち、(肝臓に属する)「胆」は音訓ともに用いられたが、(脾臓に属する)「胃」は原則として音読して用いられた。

一、上代文献には「胆」を「い」の借訓仮名として用いることがある。「い(胆)」という語が古くより存在したことがうかがわれる。

一、ただし、この語は普通の作品の中に単独で用いられることはごく稀で、辞書・訓点資料の和訓としての用法にほぼ限定される。

一、今日では、かろうじて「くまのい(熊胆)」ということばの中に残存するのみである。

一、「い(胆)」が衰滅にむかった理由は次のように推測される。ひとつには、近代以後、一般に、内臓を字音語でよぶ傾向がよくなったため、和語「い」は廢用に帰す趨勢下にあった。ふたつには、字音語胃イがよく使われるようになり、同音衝突によって胆の衰退は決定的となった。

一、内臓をあらわす語としては、胃イは、心臓シンゾウと共に基本語として用いられているのが現状である<sup>(4)</sup>。

注

(1) 拙稿『「こころ」から『心臓』へ』(『国語学』(昭和五十一年三月)。のちに加筆、『身心語彙の史的研究』(昭和五十四年一月・明治書院)に所収。

(2) 京都嵯峨清涼寺の釈迦如来像の像背には、五色の絹でつくった蔵府の模型が納入されている。(これは九八五年に宋で造顯され日本にもたらされたものである。)胎内奉籠文書には「入瑞像五蔵具記捨物」として、胎内の蔵府の種類・色彩・内容

物が明らかにされている。

胃白色 心赤色 藏玉 肝赤色 藏香 胆紺色 藏舍利 肺紅色 藏梵香 肚錦 藏香 腎紫色 藏香 啖白色 腸白藍色 背皮白色 膈黄色  
 このうち「肚」は「脾」に同定される。渡辺幸三「清涼寺釈迦胎内五蔵の解剖学的研究」(『日本医史学雑誌』七卷・一―三号)に、「五行説によつて蔵府に配当される五色(筆者注、『和名抄』は『白虎通』に曰くとして五行説に依つた五色を宛てている)が施彩されたのではなく(中略)中国伝統医学の蔵府の実質の色とする色彩が施彩されたものである」としている。  
 狭義の五蔵、すなわち「心」には「玉」を、「肺」には梵書を、「肝」「肚」「腎」には香を蔵している。いわゆる六腑すなわち「胃」以下には原則として内容物は記されていない。主として本稿でとりあげる「胆」のみが、ひとり「舍利」を蔵していることは興味ふかい。

- (3) 『前田本色葉字類抄』には「国郡付名所」として「胆吹山イフキノヤマ七高山之一。在美乃國不破郡」をあげている。  
 (4) 『日本古典文学大系』(下・三三七―ページ)の頭注による。なお、『角川日本地名大辞典』では「比定地未詳」としている。  
 (5) 『続日本記』では「生馬山」の表記がみえる。  
 (6) 『古事記・中・垂仁』には「伊賀帯日子命」とある。  
 (7) 『風土記』においても「伊美(豊後)」、「伊我山(出雲)」などはあつても、「胆」を「い」の借訓仮名に用いた例はなかった。

- (8) 「胆」を「い」と訓ませた地名で、のちまで継承されたものには「胆沢(城)」が有名である。この表記は『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』等にも見え、二〇巻本『和名抄』には「陸奥国 国府在宮城郡鎮守府在胆沢郡〔中略〕胆沢伊佐波」とあり、この胆沢城は、前九年の役まで在ったという。なお、北海道(蝦夷地)を「胆振国」と称したのは、本文に示した斎明紀「胆振鉏」に據つて、明治新政府が命名したものである。

- (9) 「胆」は「きも」と訓まれることもある。これについては三・二の注(1)でふれる。  
 (10) 角川古語大辞典による。

- (11) 本文の『弓張月』では「胆」に「きも」の振仮名がある。キモは厳密には「肝」の和訓として用いられたが、『万葉集』の「群肝の」などの表現によつてもうかがわれるとおり、胸部におけるさまざまの臓器をさすことのできる、やや意味の広い語であつたとおもわれる。『名義抄』では「肺・肝・胆」いずれにもキモの和訓がある。日本国語大辞典には『太平記・三九』(463ページ)の「秋刑の罪に胆を嘗ぎ」とある。凡例によれば振仮名は校注者の判断によるものであり、この振仮名の

根據は、元和八年刊記整版本かもしれないので、太平記成立当時の訓みであるとした場合には認めがたい。臓器としての「胆」を「きも」とよむ例は中世末あるいは近世に多くなつたのではないかと筆者にはおもわれる。すなわち本節に述べるとおり、漢語「胃」に圧迫されて「胆」の和訓が不安定になつた時期と重なり合うのではないかと推測するのである。たとえば、「用藥須知・後」には「鶏胆 にはとりのきも」とある。しかし一般に、「胆」は三・一に述べた「胆」のもつ精神力・気力に関する用法に傾いているとみとめられる。四節に擧げる『猪の文章』における「胆をふとくし」の類である。そのほか「――が大きい(小さい)」「――がすわる」「――をとばす」「――を落す」「――に毛が生える」「――に銘ずる」などの慣用句も同様である。

(12) 『反故集』にもある。

(13) 国立国語研究所報告78(昭和五九年)には「基本語六千」の調査があり、それには総称としての内臓のほかに心臓・肝臓・肺・胃・腸・盲腸が入っている。しかし「基本語二千」の調査になると内臓という語さえ入らず、リストにあるのは胃と心臓のみである。くわしくは「身体語研究の視界」(『言語生活』昭和六二年二月)に示した。

—— 文学部教授 ——